

# 国語科学習指導案

日 時 平成 17 年 9 月 13 日 4 校時  
学 級 1 年 A 組 ( 男子 12 名女子 19 名計 31 名 )  
場 所 花輪中学校 1 年 A 組教室  
授業者 教諭・大越龍二

1、単元(教材)名 三、物語を楽しむ 『少年の日の思い出』

2、単元設定の趣旨

(1) 教材観

この作品は、多くの出版社の、長い年月を経た教科書に変わらず掲載され続けている。ドイツという風土も歴史も異なる国を舞台とした翻訳文学であるにもかかわらず、情景や心理の描写が美しく豊かで、じっくりと読み深める学習にふさわしい文学性豊かな作品である。また、内容的にもちょうの収集に熱中する主人公の様子や心情、その情熱の激しさのあまり、友人のちょうを盗み、つぶしてしまった主人公の悲しみや、隣の少年や母親との葛藤や交流、そして自らの手によるちょうとの決別など、多感な少年期を迎えている中学生が共感を持って読み深めることができる。そういうことが長く教科書に載り続けている理由なのだろう。現在、教科書では1学年の最後に「好きな作品を選び、自ら取り組もう」ということで、説明文の「ちょっと立ち止まって」とどちらかを生徒自らの選択によって扱うことになっているが、1年生のうちに素晴らしい文学に出会わせ、文学を学ぶ楽しさを体験させる格好の教材と考えて、この時期にじっくり時間をかけて扱うことにした。

この作品は、「わたし」のもとを訪れた客が少年の日の思い出を語りだすという形で描かれている。少年時代の回想が中心となるが、客が思い出を語りだす現在の場面を本時は取り扱うこととした。いわゆる額縁の部分である。しかも、通常作品であれば、最後に再び現在の場面に戻るべきなのに、この作品は自分のちょうをつぶす場面で終わってしまい、現在の場面に戻ってこない。とすれば、この額縁の持つ意味は何だろうか。それは、「少年の日の思い出」が、現在の「客=僕」にとってどんなものなのかを示すことではないだろうか。ちょう集めにいちずにうちこむあまりに過ちを犯してしまう。そして、取り返しのつかないことをしたと自分で判断した時、ちょうをつぶすことで、ちょう集めに熱中した少年の日との決別をする。この思い出は苦く、「話すのも恥ずかしい」ものであるが、同時に、ちょうに熱中した日々はまぎれもなく「客=僕」にとっての「少年の日」であり、その思い出は苦いばかりではなく、胸の中に「幼年時代の思い出」「あの熱情」を引き起こすものでもある。客が「わたし」に語りたかったのは、「盗みを犯してしまった思い出」ではなく、「ちょうに熱中するあまり過ちを犯してしまった思い出」であると考えている。その自分の思いをじっくりと話し、分ってもらえると感じたとき、客は思い出を語り始めるのだと思う。この現在の場面では、そういった「客」が思い出を語り始めるにふさわしい場であったことをしっかりと読ませると共に、その思い出が客にとって、苦いが、同時に懐かしさを感じさせるものであることを感じさせる必要があると考える。そのような考えから「妙なものだ。ちょうを見るくらい幼年時代の思い出を強くそられるものはない」を中心に、読み取りを進めようと考えている。

(2) 生徒観

まじめで素直な生徒たちである。学習に関して作業的な課題を与えらるものも言わず集中して行なうようなところがある。学力的にも安定していて、上位・下位の生徒は少なく、中の上クラスの生徒が多いため、授業は比較的やりやすい。ただ、積極性ということに限ってはやや問題があり、挙手発言をする生徒はさほど多くない。また、文章の音読が得意でない生徒も何人かいる。そこで、この作品の読み取りを進めるに当たっては、まず自分の考えを持つということ、それを発表するというところからはじめ、積極性を高めたいと考える。

(3) 学習観

中学校 1 年生の本教科書では、文学作品は4つ出てくる。赤川次郎「親友」、今江祥智「麦わら帽子」、米倉斉加年「大人になれなかった弟たちに・・・」と、この「少年の日の思い出」である。しかし、この作品と「親友」は作品の読み取りを主として設定されているのではない。「大人に・・・」を授業した際には、子どもたちはあらすじを追い、心情を考えるという学習方法に慣れていることが感じられた。文学作品の楽しさはストーリーや登場人物の心情を追うことばかりではない。そこに文字で描かれているものが具体的なイメージとなり、そこに登場する人物に感情を重ねあわせ、共感する時、文学を読むことの楽しさを感じるのではないだろうか。この教材では、「言葉の一つ一つを大切に読み取る中で、その言葉で表現されているものや心(形象)を具体的にイメージする」ということに重点をおき、学習を進めたい。そのために、まず精読の1時間目には、最初の一段落をじっくりと時間をかけ、書き込みをしながら「読み方」の学習をしたい。しかし、全ての場面をそのようにして読むことは時間的にも無理なことなので、生徒にはそのような「読み方」で予習してこさせ、自らの気づきとして発表することから授業に入りたい。また、それぞれの場面で中心となる文は、語彙・文法事項なども含め、とりたてて指導をし、日本語に対する感覚を鍛えたい。それはまた、言葉を大切に読み取ることの実践ともなる。授業の最後には、生徒自身の言葉でその日の授業をまとめさせることで、理解を確かにし(同時に理解度を評価し)表現力を鍛えたいと考える。

### 3、単元の指導計画及び評価規準

#### (1) 単元の指導目標

- ・ 人物の言動や気持ちを読み深め、それぞれの生き方や互いの関わりについて考えを深めることができる。(関心・意欲・態度)
- ・ 文学作品の情景や心情を描写した表現を読み深め、情景や心情を豊かにイメージすることが出来る。(読むこと)
- ・ 文脈の中における語句の意味を正確にとらえ、理解することができる。(言語事項)

#### (2) 単元の指導計画

教材 ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」

時間	指導目標	関心・意欲・態度	読む	言語事項
1	全文を通読し、感想を持つことが出来る。	積極的に作品に取り組もうとする。	全文を通読し、登場人物や背景を理解することが出来る。	文中の漢字を読むことが出来る。
2	全体の構成をとらえ、難語句について調べることができる。		全体が、現在の場面と回想の場面ができていること、「客」が「僕」であることなどを理解することができる。	難語句を調べ、意味を理解することができる。
3	最初の場面の前半を精読し、客と「わたし」の関わりや背景を理解することができる。	言葉を大切に読み取り、登場人物の気持ちを考えようとする。	客と「わたし」の関係を読み取り、場面と背景を豊かに想像することが出来る。	文中の重要語に気づくことができる。
4	客が思い出を語り始める場面を(本時)精読し、客が語り始める理由やそのための場面設定を理解することができる。		ちょうどたいする客の思いを想像させる表現に気づくと共に、思い出を語るにふさわしい状況であったことを理解することが出来る。	文脈の中で用いられている意味を正しく理解することが出来る。
5	「僕」がちょうど熱中している場面を読み取り、その思いの激しさを理解することが出来る。		「僕」がちょうど対して抱いていた熱情を理解することが出来る。	
6	青いコムラサキの場面を読み、「僕」のEメールに対する思いを読み取ることが出来る。		「僕」が自分の収集に抱いていた劣等感やEメールに抱いていた思い、傷つけられた悔しさを理解することが出来る。	
7・8	クジャクヤママユの場面を読み、「僕」がクジャクヤママユを盗んでしまう気持ちの動きを理解することが出来る。		「僕」のクジャクヤママユに抱いていた思いの強さ、「見たい」～「手に入れたい」と変化していく気持ち、「盗む」という意識はなかったことを理解することが出来る。	
9	Eメールに謝りに行く場面を読んで、「僕」の思いがEメールに伝わらないことを読み取ることができる。		「盗む気はなかった」ということが理解されないだろうという「僕」の気持ち、正義をたてに「僕」を軽蔑するEメールの様子を読み取ることができる。	
10	最後の場面を読んで、ちょうをつぶした理由を考えることができる。		「僕」が「ちょうを暗闇の中でひとつひとつにぎりつぶしてしまった」ことの意味を考えることができる。	
11	最初の場面に戻り、客が思い出を語った理由を再度考えることができる。	「少年の日の思い出」というタイトルに関わって、作品の主題を考えることができる。	客が思い出を語った理由を考えることを通して、作品の主題を考えることができる。	

4、本時について

(1) 教材名 「少年の日の思い出」

(2) 目標

「客」がちょうを見て抱いた思いを理解し、少年時代の思い出を語り始める心情を考えることができる。(読む能力)

(3) 本校の研究主題と関わって

本校研究主題

「いきいきと学ぶ生徒の育成 ～ 基礎・基本の確実な定着を図る指導を通して ～」

文法的な事柄も含めて、一つの文を丁寧に読み解くことで、「基礎・基本の確実な定着が図られれば」、場面の様子や登場人物の心情もより具体的にイメージできるようになり、「いきいきと学ぶ生徒を育成できる」と考えられる。

(4) 方針

前時には、作品の冒頭部分をじっくりと読み取ることで、いわゆる「行間を読む」ことを実感した。本時は、まずその実践として、本時の場面について自らの力で読み取ったことを発表しあうところから入る。そして、教師が示した学習文(課題となる文)を丁寧に読み取っていき、そこから「客」のちょうへの思いや、その思い出を語り始める心情に迫っていきたい。また、最後は個人に返し、自分の言葉でまとめさせることで、表現力の向上や理解の深化も図りたい。

(5) 本時の評価の観点と具体的評価規準

具体的評価規準			
	A：十分満足できる	B：おおむね満足できる	C：努力を要すると判断された生徒への具体的な対応・手立て
読む	「客」が少年の日の思い出を語り始める理由を、ちょうの収集を見て思い出がわきあがってきたこと、友人である「わたし」になら自分の思いがわかってもらえるという思い、自分の非礼に対する詫びなどのほか、時間や場所・落ち着いた雰囲気と関連付けて理解することができる。	「客」が少年の日の思い出を語り始める理由を、ちょうの収集を見て思い出がわきあがってきたこと、友人である「わたし」になら自分の思いがわかってもらえるという思い、自分の非礼に対する詫びなどと理解することができる。	ノートを振り返らせ、客の心情を考えさせる。

